
潔く、散りたかった。

瀧陸瑠璃*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

潔く、散りたかった。

【Nコード】

N1076L

【作者名】

瀧陸瑠璃*

【あらすじ】

新一と志保が付き合いだした！！

蘭は戸惑いを隠せない。

取り合えず、読んでみてください。

プロローグ。(前書き)

この小説はいわゆる二次創作です。

CPは新志ですので、王道CP推奨の方は閲覧をご遠慮ください。

プロローグ。

はじまりは小さな違和感だけだった。

とげとげの違和感は心の中を走り回って、傷だらけにしてしまった。あいつも、わたしの事好きだと思ってた。待っててくれって言ったし、告白っぽいこともした。

なのに・・・何でなの？何で、あいつのとなりがあの人なの？

幼稚園の頃から、小学生の頃から、あいつのとなりはわたしの特等席だったのに。

あいつは、わたしには見せない笑顔であの人に話しかけてた。

あの人も、見た事無いくらいに綺麗に微笑んでた。軽口を叩きながらも笑い合ってた。

昔の自分とあいつ・・・淡い恋心だった頃の、あの頃と重なって見えて。悲しくなった。

新志+蘭 阿笠邸にて

side 蘭

夏休み最後の日。朝寝坊したわたしが最初に見たのは。

「おはよう、お父さん・・・」

「お、らあくんちゅわあん・・・」

今日も朝から酒瓶を開けてるお父さん。真っ赤な顔で沖野ヨーコさんのライブDVDを鑑賞中。

少し前まで”名探偵眠りの小五郎”と呼ばれていた人とは思えない。コナン君が居なくなっただけからは全然ダメ。なんでかわからないけど。

”眠りの小五郎”はどこへ！？と週刊誌に騒ぎ立てられる毎日。

はあ・・・まったく、お父さんてば、また朝から飲んでるの？

「良いだろ、コナンの奴が居なくなっただけからなんか調子出ねえんだ

よ…依頼も減るし…金も減るし…」

そう言つと、パカッと酒瓶を開ける。ガボガボと飲み干す。

「たく、夏休みでも早く起きろよな…くう〜！朝っぱらから飲む酒は上手い！」

また、開ける。空になった瓶をわたしが片付ける。 ”流れ作業”の文字が、頭の中でパレードし始めそう。

「お父さん、わたし…ちよつと出かけてくるね」

「え、おい、ら、蘭！」

ビールの空き缶を振り回すお父さん。

はあ…酒代で、家計が赤字なんて…笑えない。

ピンポーン！ピンポーン！

工藤と書いてある表札。その横にこじんまりとあるインターフォン。何回押しても、押しても全然新一が出て来ない。

「はあ…まったく、どこにいつてるのよ？」

わたしの名前は、毛利蘭。新一の幼馴染？恋人？

どっちでも…ない。けど、けれど。

あいつはわたしの事嫌いじゃないと思うし、わたしはあいつの事が好き。

ピンポーン、ピンポーン！

まだ新一は出て来ない。腕時計を見ると時間は、午前九時。

「寝坊してるのかな…」もしかして、博士の家かも。

そう思つて、わたしは博士の家のインターフォンに手をかけた。

side 志保 阿笠邸

「やつぱ、灰原…じゃねえ、宮野の料理は美味しいな！コナンの時もたまに食つてたけどさ、最高だぜ！」

「…お世辞言つても何も出ないわよ、工藤君」

「はは、哀君…しかし、新一の言う通りじゃよ！哀君は意外と、家庭的なんじゃないなあ…」

博士が感慨深そうに頷く。

「意外とは余計よ。それに、哀じゃなくて志保よ。もう戻ったんだから」

「はは、済まないのお」

「たく…はやく食べてくれるかしら。お皿洗わないと。手伝ってくれるんでしょ？」

軽く睨み付けると、工藤君は「はいはい」と言って慌ててトーストを口に突っ込んだ。

ピンポーン！

「博士、お願い」博士がいそいそと玄関に向かう。

ピンポーン！

「はい、誰じゃ…ら、蘭君。どうかしたのかね？」

蘭さん…顔が強張っていくのが自分でもわかる。

泡立てたスポンジが、力の入った手の中でくしゅっと音を立てる。

「あれ、このサンダル、新一のだ。新一、来てるの？」

声が聞こえていないフリをして「もう、早くして」と工藤君に声をかけた。

「おう。皿洗いだろ、おれにまかせろ」

「あら、名探偵さんは家事も得意ってわけ？心強いわね」

プロローグ。(後書き)

本当に駄文だなあ、と改めて感じます…。

ですが、ここまで読んでくれてありがとうございます。

コ哀LOVEの気持ちだけで突っ走って書いたものなので…。
感想、よろしく願います。

彼女（前書き）

第一話です。

蘭は嫌いじゃないです。多分。ただ、灰原の方が好きなだけで、わたしも新一も。

新一以外の人と幸せにしてあげようと思ってます。

えっと、グダグダですけど読んで下さい！

彼女

side 蘭 阿笠邸

「チャイム鳴らしても誰も出て来ないから、新一…ここに来てるかなーって」

「新一なら来とるぞ。志保君もいるが、それでも良いじゃろ？」

志保さん??聞いた事無い名前。

「あの…志保さんって誰？」

「哀君のお姉さんでなあ、わしが養子に引き取ったんじゃよ」

そう言つて博士はどこか寂しそうな、それでいて嬉しそうな複雑な笑みを浮かべる。

へえ、哀ちゃんのお姉さん。きつと、美人さんなんだろうな…。

チクリ、と心に棘がささった気がした。

「じゃあ、ちよつと上がつて話でも」

「あ、うん。おじゃまします」

玄関からリビングへ一歩踏み入れると、声が聞こえてくる。

「ちよつと、工藤君…そんなので洗つたらお皿にキズがつくじゃない」

「え…あ、わりい」

「まったく、わたしが洗うから、あなたは泡を洗い流してくれる？」

「…わかった」

「…あら？」

その声にあわせて、志保さんが顔を上げる。

「あ…わたし、宮野志保」

唐突過ぎる自己紹介。哀ちゃんとそっくりな顔と声。

赤っぽい茶色の綺麗なショートカット。真っ白い肌に整った目鼻立ち。瞳は、翡翠のように光りの加減で煌いて。

姉妹とはまた違った、まるで同じ人みたいだと思つてしまうような、それくらい哀ちゃんと、彼女は似ていた。

「志保：さん。毛利蘭です、初めまして」
どうやって呼べばいいのか、ちよつと悩む。

ま、まさか、新一の彼女…じゃないよね。

哀ちゃんも大きくなったらこんな感じなのかな？

「あ、蘭じゃねーか。どうかしたのか？」

「へ…いや別に。あ、新一！志保さんのこと、紹介しなさいよお！」
誤魔化すみたいに大声を出す。

「ああ…コイツは、おれの彼女。名前は宮野志保で…今度帝丹高校に転入する」

え…新一の彼女…さん。

新一は、すごく自然にすらすとその言葉を言った。

これが当たり前なんだって言うみたいだ。これが、当然。これが、昔からのこと…。

暗い顔になったわたしを心配したのか、新一は「そうだ、今日はなんかあったのかよ？？」と笑った。

「う、うん。あの、コナンくと、哀ちゃんのこと、気になって」

そんなの嘘。ただ、新一に会いたかっただけなのに。

「博士なら、何か知ってるかなって、二人のこと」

コナンくんか…一ヶ月前お母さんの文代さんが急に探偵事務所に来て、アメリカに行っちゃった。確か、哀ちゃん…灰原哀ちゃんと一緒に住むことにしたって言ってたよね。

『バイバイ！蘭姉ちゃん』

『さようなら、蘭さん』

いつごろからだろう？哀ちゃんとコナンくん。仲良さげに笑ってた。

今まではケンカ友達っていうか、ただの友達なんだろうって思ってたのにな。

たまにもものすごく真剣に、顔突き合わせてこそこそ話したりしてたけど。

そこから、特別な…というか、恋のにおいはしなかった気がする。

でも、二人がアメリカに行くときは、恋人って感じがした。

…新一にもコナンくんにもフられちゃった気分だ。

あれなんで、二人のこと同等に考えてるの、わたし。

片想いの新一と、弟みたいなコナンくん…。

「あの、何か食べていく？」

志保さんが小さく呟く。

「あ…ありがと、でもわたし…帰るね。あは、お邪魔虫だったみたいね」

明るく笑ってみる。でもきつと、わたしの顔…強張ってるんだ。

「…そう。忙しいのに引き止めちゃったみたいね。ごめんなさいね？」

「ううん。良いの。志保さん、わたしたち、友達になろうよ！帝丹高校に来るんでしょ？よろしく、志保さん。あ…わたし帰るね、お父さんの面倒見なきゃ」

黙ってたら涙が出そうで、早口でまくしたてて、言い訳するみたい
に下を向く。

「そ、それじゃ…！」

そう言っ慌てて玄関へと走る。

「あれ、蘭君もう帰るのか？」

お茶を煎っていた博士が慌てて玄関に来る。

「うん…お邪魔しました」

彼女（後書き）

コナンと灰原はアメリカに引っ越した設定です。
蘭姉さんの相手はどうしよう…。

蘭の涙（前書き）

蘭を遠まわしにフってしまった…。

本当に駄文なので、読んで後悔してもわたしは知りません！！
それでは。

蘭の涙

side 蘭 阿笠邸前の道

「お邪魔しました…」
ボタン。

ドアを閉めた音が合図になったように、わたしの目から涙があふれ
出た。

「ひつく…えつく」

どうしてなんだろう。どうして…わたしじゃないんだろう。

あんなに好きだったのに。待っていてくれて、新一言っただのに。
志保さんなんて、全然知らなかった。

電話でも、メールでも、会ったときにも、一言も聞いてない。

あんな急に現れて、恋人になりましたって言われて、納得できるわ
けないじゃない…

なのに、どうしてだろう。心のどこかで納得してる自分がいる。

この気持ちを誰かに聞いてほしい…。

カバンの中から新一にもらった携帯電話を取り出して園子に電話を
かけた。

この携帯は新一にもらったもの。

ストラップはトロピカルランドで買ったもの。

わたしの持っているものはほとんど、新一との思い出でいっぱいだ。
そう思うと、また哀しみが湧き出てくる。

side 志保 阿笠邸

「お邪魔しました」

ボタン…音を立ててドアがしまる。

「はあ…」緊張した。

蘭さんと会う時って、いつも緊張する。

灰原哀の時もいつも緊張してた。

理由は…多分、工藤君が好きだった人だから。それと、お姉ちゃん

に似てるから。

「な、宮野。後でさ、帝丹高校行かねーか？」

「どうい風風の吹き回し？」

「転入届、出さないと駄目だろ。ま、宮野の事だから満点近い点数ので合格したんだろーな…」

工藤君の鼻がびくびくして。ちよつと悔しいのかしら。

「嫌味な言い方ね、名探偵さん。もちろん満点で通過したわ。国語の漢字の書き取りは一つ間違えたけど」

幸福って字。その同意語を書けて問題。

幸福、幸せ、ハッピーエンド。そんなのわたしには似合わない気がする。

考え始めると”幸福”なんて書けなかった。

今のわたしはすぐく幸せ…組織にいた頃には考えられないくらいに新しい家族、初めて出来た恋人、優しい博士。恐怖のない日々。

そして…初めて通う、日本の学校。わたし、こんなに幸せでも良いのかな。

「たくよ…幸せって誰でも手に入れられるんだぜ、手に入れたいと願えば。帝丹高校行こうぜ」

工藤君がお皿を片付けて、エプロンをきちんと畳む。

「志保君、どこかへ出かけるのか？」

「ええ。ちよつと、転入届出しに」

「行つてくるぜ、博士」

工藤君がわたしに右手を差し出した。

「手、繋ごうぜ」

「…ええ」

彼の手はあたたかくて、これが“幸せ”なのかなと思った。

蘭の涙（後書き）

ああ、ごめんなさい蘭。

本当に…でも原作じゃみれないことをしたかったんだ！！

青山剛昌先生、灰原を幸せにしてください。

帝丹高校に転校生（前書き）

帝丹高校に志保ちゃんが転校してきました！！
でも現実にこんなコいたらモツテモテだろうなあ…。
とか考えてます。

帝丹高校に転校生

「なあーな今度、帝丹高校に転入生来るんだってよ」

「マジい？女子？男子？」

「さあ…なんか、転入テスト国語以外満点だつて」

「はは、眼鏡のがり勉クンだったりしてな」

side 蘭 帝丹高校、教室

「宮野志保です、よろしく」

志保さんだ。帝丹高校のブレザーを身に着けた、転校生。

クラスメイトが大声で騒いでるのなんて、耳に入らない。

やっぱり帝丹高校に来たんだ。

「夫婦」とか言われていた日々のことを思い出して、胸がチクリと痛む。

「それじゃ、工藤君の隣…で」

「はい」綺麗に髪の毛なびかせて、志保さんはあいつの隣に座った。

「また一緒ね。あの時と」意味深なセリフを呟いて。

side 志保 帝丹高校、教室

「それじゃ、工藤君の隣…で」

そう言われて柄にもなく、胸が高鳴った。

また江戸川コナンと灰原哀の時のように…工藤新一と宮野志保で隣にいろ。

「また一緒ね。あの時と」

「だな」

「組織…無くなったそうね」

そう、ジンとベルモットがあの方と撃ち合い…幹部とボスを無くした組織は、消えた。

「ああ、真の平和が訪れたんだ…おれにも、お前にも」

「相変わらず気障なのね、名探偵」

「良いだろ。あ、志保。教科書、持ってるか」

志保、か。

昨日、わたしが頼んだの。せつかくもとの体に戻れたんだから、そう呼んでって。

組織にいたころは、誰からもシエリーと呼ばれていて、志保って呼んでくれる人はお姉ちゃんだけだった。

ただ、そのお姉ちゃんも死んでしまっ…灰原哀の時は吉田さんと蘭さんが呼んでくれたけど。

それは本当の名前じゃないから。

工藤君には、好きな人には、名前で呼んでもらいたい。

「持っていないけど…貸してくれるの？」

「おう、次は数学だから…」

「それと…ありがとう」精一杯の笑顔で微笑む。

「可愛い…」

え…工藤君？

「それで？今日はどこから授業なの？」

帝丹高校に転校生（後書き）

ちよっちラブラブな感じ&組織の壊滅。

いやあ、脳内変換で山口勝平さんと林原めぐみさんの声が聞こえる気がします！！

駄文失礼しました。

園子の決意（前書き）

えっと、蘭と新一の仲を修復しようとして走る園子ちゃん！
でも、蘭はあきらめモードで…。

園子の決意

side 園子 帝丹高校、教室

昨日の朝、蘭から電話がかかってきた。

『もしもし園子？あたし、蘭』

「蘭？どうしたの、涙声だよ」

『新一が…新一があ…』

ああ、新一くんか。

髪型変えたのに気づいてくれなかった！とかでしょ。

1ヶ月くらい前。夏休みに入ってから一週間くらいだったかな。

工藤新一は何の前触れもなく、突然帰ってきた。

「でっけえ事件」のせいで戻れなくてすまなかったと言って。

すぐに付き合いだすんだろうと思っただけ、蘭と新一くんの間は特に進展もないまま。

何となくのらりくらりと交わされ、いい感じになると事件が起こる。しかも、新一くんには最近美人の相棒ができたって噂だし。

たく、あの推理オタク野郎は、事件のことしか目に入っていないのかね。

「どうしたのよ、ダンナはホームズの話しか話してくれないってか？まったく、またノロケですか奥さん」

からかうように蘭に話しかける。

『違うの…宮野志保さんって人と付き合いだしたのよお…ひっく』
え？

そんなのアリエナイ。

「えええ？嘘でしょ、信じられない！…ちょっと、蘭迎えに行かせるからあたしんちに来ない？」

どう言っ事なんだろう。

あの新一くんが蘭以外の人と付き合いだすなんて。

それからはものすごく時間がおそく感じた。

はやく、蘭の口から真実を聞きたい。
わたしは、少しも納得できないよ…。

「園子お…」

車から降りてきた蘭の顔は涙でビショビショで、痛々しかった。

「ちよつと蘭！どうしたのよ、ホントなの、新一くんのこと…」

蘭は小さな子供のように頷いた。

「あたしにも話聞かせて？ね、蘭」

「うん…」

蘭の話をまとめると、急に彼女が現れたんだそうだ。

ほんで、急に彼女だって言われ…

それでその彼女っていう宮野志保さんはすっごく良い人ばかったそう
うだ。

蘭は早くもあきらめモード。

「だって、新一待ってるって言ったけど、それは幼馴染としてって
ことかもしれないし…好きだって、わたしが言ったことはあつたけ
ど、言われたことないしい…それに、その好きだって、幼馴染とし
てかもしれないし…もう、新一幸せそうだったからそれで良いかも
しれない…」

とか言ってるし。

本当にもう、聞き分け良いだけが優しさじゃないんだからさ。

ふう、ここは推理クイーン園子さまが何としても新一くんを説得し
て思ってることを白状させないとね！親友の幸せのために！

「あ、志保。教科書、持ってるか」

「…ありがと」

宮野さんが新一君にそう言って…お互いに真っ赤になった。

何となくだけど、一瞬だけ微笑ましいなって思っちゃう自分がい
て、蘭への罪悪感で胸がいつぱいになる。

「負けちゃった…志保さんに」わたしの後ろから蘭の声がする。

って、負けるってあんたねえ…はやく何とかしなくちゃ…。

わたしはもう二度と、蘭が悲しむ顔なんて見たくない。

s i d e 蘭 帝丹高校、教室

「それと…ありがと」

志保さんが、微笑んだ。

今まで無表情だっただけに、その笑顔はすごく綺麗で。

ああ・・・負けてるなわたし、って実感する。

新一の顔が赤くなってる。

こんな顔、わたしには向けてくれなかった。

これが、“恋人への”笑顔なんだ。“幼馴染への”笑顔じゃなくて。

「負けちゃった…志保さんに」

でも、もういいや。悲しくないって言ったら嘘になるし、新一のこ

とは今でも好きだけど。

志保さんなら、新一をまかせても大丈夫そつだ。

悔しいけど、彼女はどこかオトナで。

園子の決意（後書き）

ああ、タイトルが思いつかない…。

蘭の相手は瑛祐さんと新出先生とどっちがいいだろう？

新出先生はらんまの東風先生みたいで何気に好きです。

園子さんは映画での友達思いなところがすごく心に残ってるので。
蘭と新一のことをひやかしながらも応援してて好きです。

天使と悪魔？ (前書き)

組織の話を持ちホラ出しています。志保には幸せになってほしいんですけど、罪の意識を全て消し去ることはしてほしくありません。後悔を新一と一緒に背負って生きていてほしいですね…。後若干、キャラが壊れかけています…すみません。

天使と悪魔？

side 志保 帝丹高校

「蘭！…ちよつと」鈴木さんが蘭さんに話しかけてる。

純粹無垢な真つ白で綺麗な天使たち。

黒の世界の血にまみれ汚れた悪魔。

まったくの正反対だわ。彼女たちの悪なんて、限りなく白に近いグレーのようなもので。

あらためて、自分の罪の重さを実感する。

何人も人間を死に至らしめてきた。

確かに、わたしが直接殺したわけじゃない。

でも、わたしは間接的に何人も人間を殺してしまったのに、わたしは、今無事に生きている。こうして、のうのうと。

あの時、組織が壊滅するとき、FBIと一緒に行って殺されれば良かったのかもしれない。

「あの、宮野さん？どうしたの、気分でも悪いの？顔面蒼白って感じだよ？」

…え？気づけば、わたしの目の前に鈴木さんが立っていた。

「あ…いえ、別に大丈夫よ」

「そっか、よかった」

鈴木さんの笑顔がピクピクと引きつってる。

何でだろう、わたしこの人に何かしたかしら？

宮野志保の姿で会うのは今日が始めてのはずだし…。

もしかして、蘭さんに頼まれた、とか？

“蘭は何だかんだいって良い奴だからよ、きつとお前と仲良くなれるはずだぜ？”工藤君の言葉が脳裏に浮かぶ。

「あ、おはよう、志保さん」

蘭さんは意外と自然に笑ってた。

「あ、ちよつと、蘭？」

「あれ、園子どうかしたのか？何怒ってんだよ？」

工藤君がわたしの隣できょとんとした顔をする。

「ねえ、新一くん。ちよつと真面目な話があるんだけど。とにかく宮野さんと新一くん、話があるから着いて来て。あ、蘭もね」

有無を言わせぬ口調って、こういうものだろう。さすが鈴木財閥のご令嬢。

人に命令するのに慣れてる人の迫力だった。

天使と悪魔？（後書き）

ここまで読んでいただいてありがとうございます。

今日、初めて読者さんの感想を読ませてもらいました…

もう、すっごく嬉しかったです（><）y

感想の返事は時間の都合で返せないのですが、とても嬉しいです。

ありがとうございます！！

今年の映画、天空の難破船。快蘭要素が多すぎる！！公式でこんな

ことしちゃって良いのか！？

それに、灰原後半出てこないし…。

でも、セブンイレブンのコ哀壁紙はしっかりゲットしました

理想（前書き）

昨日はコ哀の日だったのに何にもできませんでした…。
いちおうブログの方にはUPしたんですが…はあ。
もうすぐ完結する予定です。

理想

side 志保 帝丹高校屋上

「それで…何の話かしら？」わたしは落ち着きを取り戻してた。余裕たっぷりのポーカーフェイスをつくって腕を組む。

「まず、話があるのは工藤新一！あんだだ！」

鈴木さんが、犯人はおまえだ！と言うみたいに工藤君をビシッと指差した。

「ねえ、新一くん。あなたはどうしたいの？」

「園子…おれは志保を大切に」

「…蘭は、あなたの事待ってた。待ってるってあなたは言った。あなたは帰ってきた。なのに、何で蘭をふるの？何で？ねえ、間違っていないよね？」

鈴木さんの瞳が少し潤んでいて、涙が零れ落ちそうだった。

「蘭は家族愛だったんだ。幸せになってほしい。志保は幸せにした
い」

そういう工藤君の瞳は真剣で、真っ直ぐで。

この気持ちは蘭さんに向かうはずだったのに、わたしが彼女から奪い取ってしまった。

『家族愛…』

鈴木さんと蘭さんが見事に声をそろえた。

「じゃ、宮野さんはどうなの？新一君をどれくらい知ってるの？」

「わたし…ごめんなさい」

「…園子もう良いよ」

蘭さんが意を決したように声を出す。

「でも！」

「良いの。志保さんは本当に新一のことを理解してくれてるよ？も
しかしたら、わたしより何倍も」

「…蘭、でも」

「新一は家族愛って言うてるじゃん。良いよ、幼馴染で。友達で！
今まで通りで」

そのまま、誰も何も言わない。

まるで、口を開くと負けるゲームに挑戦しているみたいに。

沈黙を破ったのは、鈴木さんの涙声だった。

「蘭：何で？新一君と蘭は理想だったのに。誰にも入り込めない雰
囲気あって」

鈴木さんの顔が涙で歪む。

「理想って何の？」

「理想の恋人：ううん。夫婦みたいでさあ…三二夫婦って言うてた
んだよ、二人の事。ずっと、二人で一緒にいるんだろうなあ…って
思ってた」

鈴木さんは懐かしむみたいに青空を見つめた。

「違うよ…わたしの理想は新一なんかじゃない。新一よりもカッコ
良くて、賢くて素適な恋人を見つけてやるんだから！」

「…蘭」

工藤君の声が掠れた。

「だから、園子も心配しないで。新一は志保さんと安心して付き合
って…わたしは、大丈夫だから」

そう言うと蘭さんにはにっこりと微笑んだ。

わたしは、大丈夫だから。その言葉を呟いた蘭さんの笑顔がお姉ち
やんと重なって見えて、わたしの目から涙がこぼれおちる。

「あらためてよろしくね、志保さん」

「よろしく、宮野：志保さん」

鈴木さんが恥ずかしそうに右手を差し出した。

「ええ。こちらこそ蘭さん、園子さん…」

ねえ、お姉ちゃん…わたし、ちゃんと笑えてる？

お姉ちゃんもお父さんもお母さんの分も、わたし幸せになるからね。
だから安心して、ゆっくり休んでね…。

「ねえ、新一くん、志保さんを泣かしたら許さないからね！」

「園子、さっきまでガンガン泣かせてたじゃないかよ……」

「それとこれとは別よ！今は友達なんだからね！」

「っはあ？おめえ、ふざけんなよ！」

理想（後書き）

あと一話で終わる予定です。

なんかキャラが壊れていきます（泣）

でも、取り合えず完結したいなあ…

青空の向こう(前書き)

とりあえず完結する予定です。

また気が向いたら番外編をUPするかもしれませんが???

青空の向日葵

帝丹高校教室 side 蘭

「よ、志保。一緒に帰ろうぜ」

新一が志保さんに話しかけてる。授業が終わって放課後。

新一はサッカー部をやめてたし、志保さんは部活に入らないみたいだから、二人とも帰宅部みたい。

わたしも今日は、空手する気分じゃないし。部活休んで帰ろうかな…

『蘭：さつきはありがとよ。おれたち、これからも友達だぜ？』って良いながら新一が笑ってくれた。

コレカラモトモダチ。その響きにやっぱり、胸の奥がずきんと痛んで：わたしはこの気持ちを諦め切れてないって実感した。

そこにいて笑ってるのは”高校生探偵工藤新一”じゃなくて、”行方不明の新一”でもなくて。

”幼馴染で初恋の新一”だった。初恋は叶わないってどこかで聞いたけど。

やっぱそうだね…神様。

志保さんがいつもの無表情な顔じゃなくて、すっごく優しそうに笑ってた。

まるで、映画のワンシーンのような綺麗な風景。

「蘭！」園子が駆け寄ってくる。

「あ、園子。どしたの？」

「…蘭。帰ろっか。新一くんは志保さんと帰るみたいだし」

「うん…ね、園子。真さんとは最近どうなのよ？」

気分を変えたくて、わたしから園子をからかう。

「ななな、何よ！ら、蘭こそ、新一君の次の恋人見つけたの？」

「園子、何言ってるのよ！わたしはまだ気持ちの整理がつかないっていうか…」

「そっか…でもやっぱし、蘭には…優しい人が良いな。蘭をもう絶
対に泣かせない人が」

園子は独り言のように呟いた。

「よし！今度軽井沢にでも行って、カッコいい大学生とかゲットし
よう！」

「ったく、またそれえ？」

天国まで突き抜けるような青空がわたしたちの上に広がっていた。

青空の向こう（後書き）

これを書いているときに、良い天気だったので青空を。
京極真さんは何気に好きキャラです。

でも、最近あんまし出て来ないんですよね…
準レギュラーキャラになるんだと思っていたのに！

さて、この話はこれで完結です。

ブログにUPした分はジンとか二人の正体にも触れているんですが、その部分は自信が無かったのでUPせず…

また、気が向いたらUPしよっかな？

ここまでこんな妄想話を読んいただき、ありがとうございます。

この話でコ哀や新志にハマった！最熱した！みたいな方がいらっしやればめっちゃ嬉しいなあ と思っています。

それでは 瀧陸瑠璃

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1076/>

潔く、散りたかった。

2010年10月13日14時21分発行